地域の健康と幸せをつなぐ　社会医療法人聖ルチア会　聖ルチア病院広報誌

ルチアめーる

2023 October
秋号
vol.12

すべて開放病棟で提供する
患者さまの人権を尊重した治療

看護部長　関根 麻紀

●聖ルチア会の在宅支援施設③ 訪問看護ステーション クローバー
●FOCUS／「嗜好」と「依存症」～脳のメカニズムに迫る～
●聖ルチア病院のプロフェッショナル／児童思春期病棟

すべて開放病棟で提供する

患者さまの人権を尊重した治療

聖ルチア病院は1983年から、全ての病棟を開放病棟にし、開かれた環境で治療を提供しています。
40年前の開放化は、全国でも例を見ない取り組みでした。
患者さま一人ひとりの人権を尊重するために、患者さまや職員の安心につながる工夫を重ねてきました。
伸び伸びと治療を受けられる環境が、
患者さまの心を落ち着けることにつながっています。

力で抑えるのではなく、コミュニケーション技術で対応

▲関根麻紀看護部長

1983年、当時理事長の柴田道二は、開かれた環境で治療を提供するために全病棟の開放化を進めました。当時は閉鎖した病棟でないと治療が難しいと考える医療者が多く、職員や患者さまに協力していただくため、何度も話し合い、理解を求めたといいます。開放病棟で提供する治療環境は、当院での患者さまの人権を尊重した治療のシンボルの一つとなっています。

また、柴田は「安全と衛生は人任せにしない。火と刃物と暴力は絶対に許さない」と言っていました。精神疾患をもつ患者さまの中には、精神症状が悪化すると時として興奮したり不穏になってしまい、周りの物や人に手を出してしまうことがあります。患者さまの特性からくる暴力は「防力（防護力）」のニュアンスも含まれています。外的刺激から自分自身を守るために手を出さないといけないくらい、追い詰められていることがあります。患者さまが故意にではなく手を出してしまう場合でも、職員は力で抑えつけるのではなく、専門看護師としてコミュニケーション技術を用いて対応するという考えは今でも引き継がれています。

患者さまや職員の安全に配慮した体制づくり

▲井手拓也副看護師長

当院の職員研修では、佐賀県の肥前精神医療センターが開発した「CVPPP（包括的暴力防止プログラム）」という技術を学ぶ機会を必ず設けています。CVPPPは患者さまの精神症状が悪化したときに、専門的な知識や技術をもとにケアをすることで患者さまと支援者の安全を守るプログラムです。

介入方法には「コミュニケーション技術による興奮状態への介入法」「リスクアセスメントの方法」「身体的介入技法」「心理的サポート」の4つの要素があると考えます。暴力の未然回避、現場での冷静な対応、暴力が起きてしまったときに患者さまや職員の安全を確保する介入や心のケアなどについて学んでいます。

残念ながら、暴力に至ってしまうケースを考慮し、グリーンコールという当院独自の管理体制も設けています。医療スタッフに限らず、事務も含めた男性職員を速やかに現場に招集させる緊急コールです。常時携帯する職員ハンドブックにも緊急コールの仕方を明記し、患者さまはもちろん、職員の安全に配慮しながら対応できる組織作りをしています。

精神科病院初の「ノー・ヒット・ゾーン運動」への参画

当院は今年6月、院内を「ノー・ヒット・ゾーン（非暴力区域）」としました。ノー・ヒット・ゾーン運動はあらゆる暴力の禁止を呼びかける病院発信の暴力、体罰防止への取り組みで、精神科病院では初めての試みです。当院は「暴力は絶対に許さない」という組織風土が醸成されていたこともあり、今回、大治理事長が取り組みへの参画を宣言したのです。SDGsが掲げる目標の1つ「平和と公正をすべての人に」にも当てはまり、社会的な意義が非常に高いものです。

「CVPPP」は危機的介入で、興奮や暴力が起きているところに介入する技術で、「ノー・ヒット・ゾーン」はその手前で、少し声を荒げているときに介入する支援的な方法です。例えば、診察の待ち時間が長引き、子どもに落ち着きがなくなったとき、親の注意の仕方がだんだん激しくなることがあります。そのまま放置していたら、親が手を出してしまうかもしれません。そのような時に「どうされました？子供さんが暇をもてあましているんですね」などと声を掛け、意識をそらすことも「ノー・ヒット・ゾーン」の大切な実践です。

ホームページ▶

職員のチームワークで患者さまの安心できる環境づくり

自分たちが被害者になるのを防ぐという観点ではなく、患者さまを加害者にさせないという意識が重要です。疾患の特性が原因となる暴力は約4割で、残りの6割は環境が原因と言われています。安全な環境を整えるには日ごろから患者さまを観察し、目が届きやすいような体制を整える必要があります。その上で、プライバシーに入り込みすぎないということも大切です。相手のパーソナルスペースを意識して関りをもつようにしています。

▲山口浩昭看護副部長

入院環境においては患者さま同士のトラブルをできるだけ避けるためにも、相性を加味した病室割りをしています。また、日ごろから医師と看護師、ナースエイドなど関わる全ての職員がコミュニケーションをとりながら患者さまの状態を確認し、職員のチームワークで患者さまが安心して過ごせるような環境づくりを心がけています。

私たちが考える最良の医療は、質の高い精神科医療技術と行動指針でもある「相手の身になって聴こう、語ろう、行動しよう」に基づき、心のつながりを大切にした精神科医療サービスを提供することです。そのために、患者さまの人権を尊重し気持ちに寄り添い、一人ひとりを大切にできる組織を目指しています。

▲「暴力の原因の6割は周囲の環境。怒りが増大化しないような働きかけを大切にしたい」と話す井手拓也副看護師長　「患者さまや職員、一人ひとりを認めあい、大切にできる組織づくりを」と話す関根麻紀看護部長　「患者さまに暴力という経歴を残させないという意識が大切」と話す山口浩昭看護副部長

聖ルチア会の在宅支援施設 3

訪問看護ステーション クローバー

聖ルチア会の「在宅支援施設」では、住み慣れた場所での暮らしや社会への復帰を支援しています。
今号では、訪問看護ステーションについてご紹介します。

精神科訪問看護の対象は、「精神及び行動の障害」があると医師が診断した方で、精神や身体症状の悪化を防ぐほか、日常生活の維持、生活技能の獲得や拡大、対人関係の維持や構築、家族関係の調整など、幅広い目的があります。

利用者様の居宅で看護を提供するため、経済的な悩みも含め生活環境をふまえた観察ができます。その上で、通院先の病院や行政機関など、多職種の支援につなげています。また、利用者様の支援だけでなく、家族の悩みや思いを聞くなど、家族支援も重要な役割です。

一般診療科の訪問看護と異なり、受診や投薬などと同じ支援体制の中に位置づけられ、利用者様の日常生活の自立を促します。病気が原因の症状に対応するなど、精神科の看護師としての知識があるからこそ、適切な支援につながります。

クローバーの特色

精神科看護の専門性と
人生経験の厚みに自信あり!

1 聖ルチア病院との連携

聖ルチア会では、外来、入院、在宅のサービスを途切れさせない体制を整えています。在宅で過ごしていても、症状が悪化したときは入院するなど、安心して継続した治療を受けられます。

2 利用者様のペースに合わせた支援

利用者様の自立を助ける支援です。料理や掃除など、利用者様が苦手な家事を手伝ったり、買い物に一緒に行くなど、利用者様が持っている力を維持、向上するのが目的です。利用者様のペースに合わせて行います。

3 作業療法士の視点も支援に導入

スタッフは看護師11名と作業療法士2名。利用者様に看護師以外の人と関わってほしいという意味もありますが、利用者様が集中して取り組めることを探す役割もあります。

4 経験豊富なスタッフが活躍

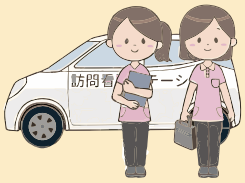
聖ルチア病院での職務経験や人生経験豊富なスタッフがそろっています。利用者様が家族に話せないことの相談を受けたり、家族の悩みを聞いたり。さまざまな経験をしているからこそのアドバイスが強みです。

5 広いエリアで訪問を実施

クローバーは、久留米市と大木町で事業所を構えています。久留米市や柳川市、大牟田市、筑後市のほか、鳥栖市や神埼市などの広いエリアで利用者様にもサービスを提供しています。

私たちが訪問看護で大切にしていること

訪問看護ステーションクローバーには、11人の看護師と2人の作業療法士が所属しています。
私たちが訪問看護で大切にしていることをお伝えします。



利用者様が安心して話をしていただける雰囲気作りです。不安や悩みを抱えて生活されている利用者様に対し、訪問の時間が安心でき、何でも話せる場になれば不安の軽減に繋がり、地域で生活しやすくなるのではないかと思っています。地域での生活を支えていくために支援していきたいと思います。

看護師 係長 岡 智美

利用者様の気持ちに寄り添った看護を心がけています。生活の中で困っていることについては一緒に解決策を考え、地域生活でその人らしく安心して過ごせるように関係機関と連携して継続支援を行なっていくことです。

看護師 係長 佐田 由香里

利用者様が在宅で生活するためにはこうあるべき、という固定概念を捨ててどのような生活や人生を希望されているかを知った上で自分には何ができるかを考え実行しています。また、取り巻く家族や支援者と連携をとりながら利用者様のQOLの維持、向上ができるようサポートしています。

看護師 紺田 美千代

利用者様の希望です。心身ともに満足する生活は、誰でも求めるもですし、その時々で変化していくものとも思います。いろんな面や時期があり、その時々に寄り添って共に成長できる所は訪問の魅力とも思います。

看護師 末吉 幸江

私が訪問看護をさせていただく中で大切にしている事は、利用者様の話をしっかりと聞くことで、悩みや不安を軽減し、気持ちが少しでも軽くなる様に支援したいと思っています。利用者様が利用者らしく、住み慣れた場所での生活が続く事を大切にしたいと思っています。

看護師 古賀 知嗣

安心して訪問看護を受けていただけるよう、話しやすい雰囲気づくりを心がけ、利用者様の生活状況に合わせた関わりや支援を通して信頼関係を築き、ご自宅で安定した生活が送れるよう支援できればと思います。

看護師 田中 洋子

訪問看護に異動して4ヶ月になります。利用者様との信頼関係を築くために、元気に明るく笑顔で挨拶をして「お邪魔させて頂きます」と言う気持ちで伺い、利用者様が話しやすい様な環境を作るように努めています。

看護師 深町 ユリ

まず笑顔で挨拶をし、利用者様の気持ちに寄り添い話を最後まで聞くことです。また利用者様の困り事を聞き必要な支援を一緒に考え援助出来るように心掛けています。

看護師 堤　晶子

私が訪問看護を行う上で大事にしている事は、利用者様との信頼関係の構築、思いやりの気持ちを常に持つという事です。病院とは違い利用者様が生活している場に伺って看護を行う為、身だしなみや所作にも気をつけています。

看護師 加治 香織

訪問で驚いた事は病気を持ちながらも生活を営んでいる利用者様のパワーです。その凄さを労いながら、充実した時間を一緒に過ごし「また来てほしい」と思ってくださる様そして少しでも元気をチャージ出来たらと願って支援しています。

看護師 原 むつ子

訪問へ異動して間もない私ですが、医療従事者としてご利用者様の安心安全を第一にと考えています。その上で、利用者様のサポーターとなれるように心掛けています。

作業療法士 福田　剛

4月から訪問看護で働いています。ご利用者様の気持ちに寄り添いながら、その時必要な関わりが持てるところにやりがいを感じています。先輩方も親身になって相談にのってくださるので安心して仕事ができています。

作業療法士 鷲頭 知世

当ステーションで大切にしていることは利用者様が地域で生活できるように、病院や関係機関との連携を図り、万全な支援体制を作ることを大切にしております。利用者様がその人らしく、持っている力を出せるように、じっくりお話を伺い、支援しています。現在はアドバンスケアプランニングの勉強を行い、今後は看取りの看護もできるように体制を整えていきたいと考えています。

看護師 所長 坂田 美紀

今最も注目の情報にフォーカス!

FOCUS

今回のテーマ

「嗜好」と「依存症」
～脳のメカニズムに迫る～

買い物、ゲーム、恋愛、アルコール、ギャンブル…。
趣味や嗜好も最近は、「依存」の言葉としてよく見かけます。
それでは「嗜好」と「依存症」は
どのように異なるのでしょうか。その境界線を学び、
心も身体も健康な生活を目指しましょう。

依存症は皆さんもなり得る
身近な病気です。
専門機関へまずはご相談ください。

医師　町田 三彩
依存症治療指導者（アルコール･ギャンブル･薬物）
精神保健指定医　日本医師会認定産業医
日本精神神経学会専門医･指導医

「嗜好」と「依存症」のボーダー

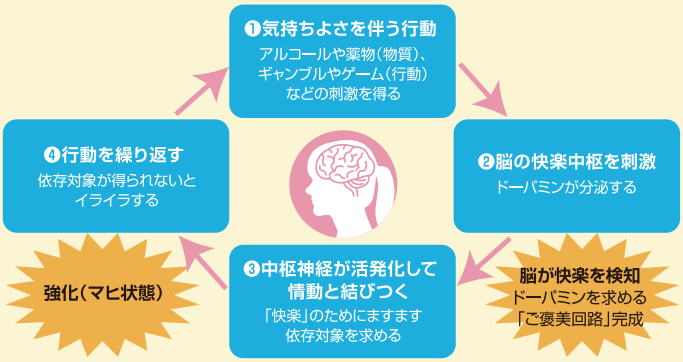
「嗜好」は楽しめる範囲であり、自身で適度な制御が可能です。一方、「依存症」は本人の意思の強弱や性格の問題ではなく、依存する物質や行為によって誰でもなる可能性があり、社会生活や身体に影響を与える場合もあります。例えば、インターネットゲームは一般的な嗜好であり、多くの人が楽しんでいます。しかし、依存症となると、日常の生活や仕事が疎かになり、長時間のプレイによって身体的や社会的な問題が起こることがあります。

依存症脳のメカニズム

代表的な依存症にアルコール、ギャンブル、薬物がありますが、依存が起こる脳内のメカニズムは共通しており、報酬系と呼ばれる脳の領域が関与しています。特に、ドーパミンという神経伝達物質の分泌が重要な役割を果たしています。依存性のある物質や行動によって脳内の報酬系が活性化され、快楽を感じることで、その結果として依存症が発症することが知られています。

例えば、アルコールを摂取することで脳内のドーパミンが放出され、一時的な高揚感や快感を得ることができます。しかし、長期的な飲酒によって脳の報酬系が変化し、アルコール摂取が増え、内臓の病気や生活や仕事に影響が生じるなど社会的な問題が起こることもあります。

■依存症脳に変化するサイクル



真面目な人がなりやすい!?

依存症になりやすい人にはいくつかの特徴があります。

- **真面目で几帳面な人**
- **ストレスを一人で抱え込みがちな人**
- **責任感が強い人**

これらの特徴を持つ人は、ストレスや孤独感から逃れるために依存性のある物質や行動に頼る傾向があります。

依存症予防には以下のような方法が効果的です。

- **依存症に関して正しい知識や依存の危険性を理解する**
- **適度に楽しむことで、過度な依存を防ぐ**
- **自分の行動や感情を理解し、依存の要因を把握する**

依存症は疾患であり、自分自身を理解することで予防することができます。もしも、あなたや家族が依存症になったら、一人で治すことは困難です。依存症が疑われたら、行政の相談窓口や依存症専門治療ができる精神科にまずご相談ください。

◀当院では依存症専門治療チームが依存症者の回復へのサポートをしています。

福岡県精神保健福祉センター

依存症で悩んでいるご本人やご家族がご相談できます

☎092-582-7500

※来所相談は毎週火曜日9時から12時まで（第5火曜日を除く）。
事前予約制。無料。

聖ルチア病院 受診相談

☎0942-33-1581

【受付時間】平日･土曜日（祝日を除く）9時から16時30分
※緊急の場合は、この限りではありません。まずはお電話ください。

つながる ささえあう 共にあゆむ vol.1

社会福祉法人 栄光福祉会

事務局 課長補佐 精神保健福祉士 樋口 陽子 さん

聖ルチア病院は法人外の多くの施設と連携し、患者様を支えています。
今回は社会福祉法人 栄光福祉会をご紹介します。
栄光福祉会は知的や精神に障害をお持ちの方で、18歳以上の方が
ご利用いただける福祉施設です。生活の場として、働く場として、
活動の場として、ご利用者様のニーズに合わせたサービスを提供しています。

▲創設者の樋口博行常務理事

社会福祉法人栄光福祉会は、久留米市三潴町の田園風景に囲まれた場所にあります。1992年、知的障害者更生施設として、父の樋口博行が栄光園（入所支援施設）を開設しました。

当初は小さな施設でしたが、より多くの方々のニーズに寄り添えるよう、その後、通所きぼう（就労継続支援B型･生活介護）、共同生活援助ひまわり、しいのみ、たんぽぽ、相談支援センターみづま等、事業所を増設しました。2003年、障害者支援法の施行に伴い、知的障害だけでなく、自閉症や発達障害の方、難病や合併症をお持ちの方も可能な限り受け入れています。

私は以前、病院でソーシャルワーカーとして勤務しており、これまでの経験から患者様･利用者様の生活を支えるには医療機関と地域との連携が不可欠であることを深く痛感し、10年程前当法人へ入職、相談支援専門員として精神科訪問看護･訪問リハビリの導入やコメディカルスタッフ･主治医を交えた担当者会議開催等･医療を巻き込んだ連携･環境作りに取り組んでまいりました。特に聖ルチア病院さんにはお世話になっている利用者様も多く、情報交換、連携させていただく機会が多くあります。

その他、医療連携室を窓口に入院や外来でのお引き受けのご相談をさせていただいているほか、退院の際には、利用者様が不安の無いよう、さらには切れ目のないサービスを連動させるため、利用者様を中心に、関係機関、主治医の先生、病院スタッフとで退院前のケース会議を通して連携を図る等、日頃より丁寧な対応でご協力いただき、感謝しております。

施設情報

栄光園 通所 きぼう
〒830-0111久留米市三潴町西牟田6323-15
TEL:0942-64-5858

就労継続支援B型　パン工房 ベル

今年7月から、当法人でつくったパンを聖ルチア病院の児童思春期病棟用に配達し始めました。ベルで人気の菓子パン「チョココロネ」「メロンパン」「クリームパン」を子どもたちが楽しみにしてくれているとのことで製造に関わるスタッフも喜んでいます。

施設と病院、それぞれの役割を遂行しつつ、地域住民の健康と生活を守るチームとして、今後も連携とご協力をお願い致します。

県外でパン作りを学んだ経験があります。にこやかな接客を心がけています。お客さんと接するのはとても楽しいです。　販売担当の利用者様の野田浩一さん

パン作りには水素水を使っています。普通の水よりも吸水率が上がるので、しっとり、ふんわりと柔らかく仕上がります。
パン販売店が法人駐車場内にございますので、是非ご利用ください。11:00～13:00
パン製造担当･介護支援員の岩隈啓介さん

聖ルチア病院のプロフェッショナル　第12回　児童思春期病棟

児童思春期病棟は2022年、51床に病床数を増やしました。発達障害の診断を受ける子が増えるにつれ、専門的な支援を求めるケースも増えています。

友達と上手に遊べないなど、日常生活で困った末、引きこもり、生活リズムが崩れてしまう子もいます。当病棟では、「朝起きて、夜寝る」という当たり前の活動の中で、自分ができていること、間違っていることを自覚することから始めます。自分の言葉で相手が傷ついたら、「自分が間違っている、直さないといけない」と気付くことで、社会生活に戻るきっかけになります。

うまくいかないとき、本人はとても苦しく感じています。問題行動だけに注目せず、環境を整えることも大切です。作業に集中できるようパーティションで囲んだり、その日のスケジュールを確認しながら行動できる工夫などです。きちんと行動できたらほめることも大切です。困っている部分の支援に注目して取り組んでいます。

▲児童思春期病棟看護師

◀8月のイベント「水遊び」のミーティングの様子

連携先の皆さまへのメッセージ

小･中学校の先生方で子どもたちへの対応に難しさを感じているとお聞きしています。支援方法を一緒に考えていければと思います。お気軽にご相談ください。

児童思春期病棟 看護師長 **柳瀬美穂子**

私のしあわせ時間

私は6年前の災害ボランティア参加後、ボランティアに関心を持つようになり社協主催のボランティア研修を1年間受講し、ボランティアとして登録を受けました。現在は約3年前から買い物支援などに月2回休日を利用して楽しく活動しながら参加しています。

ナースエイド　**武田 忠義**

▲ボランティアの制服

社会医療法人 聖ルチア会
聖ルチア病院
St.Lucia's Hospital

〒830-0047　福岡県久留米市津福本町1012
TEL0942-33-1581（代表）
FAX　0942-33-1586

関連施設

- 精神科デイケア、デイナイトケア、ショートケア
- 重度認知症患者デイケア すずらん
- 訪問看護ステーション クローバー
- 訪問看護ステーション クローバー おおき
- グループホーム ルピナス